

Title	韓国考古学関係の文献紹介
Sub Title	
Author	江坂, 輝彌(Esaka, Teruya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1974
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.46, No.2 (1974. 12) ,p.94(210)- 98(214)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文献紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19741200-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文献紹介

(一一〇) 九四

韓国考古学関係の文献紹介

江坂輝彌

一九四五年八月一五日、太平洋戦争終結後大韓民国が誕生。四年には金載元国立博物館長によって、「国立博物館叢書乙 第一冊」として「壺杆塚と銀鈴塚」と題する新羅の古都、慶州市での古墳の発掘調査の成果をまとめた調査報告書が刊行された。その後一九五〇年六月には北の侵攻を受け、博物館もソウルから釜山へ移動するなどして、動乱のため研究も一時中断を余儀なくされたが、一九五三年七月には板門店での停戦協定の調印もなされ、再び活発な研究活動が開始されるに至った。

これらの文献については西谷正訳 金元龍著、『韓国考古学概論』一九七二年四月、東出版刊に、訳者が巻末に主要参考文献として記されたものがあり、これを参照願うこととし、本稿では一九七〇年以降に刊行のものについて、主要なものを紹介することとする。

前者、金元龍教授の著書は、同教授がソウルの高麗大学校民族文化研究所編集（東亜出版社刊）の『韓国文化史大系 I 民族・国家史』の中に「韓国文化の考古学的研究」と題し一九六四年発表されたものを、若干補訂を加え一九六六年八月、『韓国考古学概論』の表題で A5 一〇二二頁の小著として二〇〇部ほど印刷、国立ソウル大学校文理科大学（日本の大学の文理学部にあたる）考古人類学科学生などの講義の参考資料などにされるとともに、教授と面識ある各国の研究者にも配布されたものである。

韓国の考古学研究の成果の大要を把握するためにはかっこうな図書であり、寄贈を受けた日本の研究者のうち、西谷氏のほか、二名がこれを翻訳にかかり、筆者がある人の訳した原稿を預り、ソウル大学校の金元龍教授の研究室を訪れたところ、既に一、二ヶ月前に西谷氏からの訳稿が到着、教授の校訂加筆がほぼ終了したところであった。しかし教授は私が預った訳稿も、私が韓国滞在中に丁寧に見て下さり、補筆して返却していただき、帰国後、西谷氏の訳著が東出版から刊行になることを話し、その訳稿を Y 教授を通じ、訳者へ返却したのであった。韓国の人々の間に金元龍教授が西谷助教授に依頼して翻訳出版したのではないかと思われた人々もあったようであるが、教授の小著を受けた人々の間で、ほぼ同時に西谷氏のほか二名が完訳し、それぞれ日本版の出版を考えたが、教授に承諾を得、校訂をお願いしたのが、韓

国に最も近い福岡に住む西谷氏が約二カ月早かつたため、東出版刊の訳著が生み出された次第である。

金元龍著の『韓國考古学概論』はその後の新発見資料を、口絵カラーフ版二葉、モノクロ、アート版四〇頁を巻頭版として、本文挿図も改訂、装も新に、A5判 総頁数一八〇頁の図書として一九七三年、ソウルの一志社から再刊されている。

なお金元龍教授、御自身も旧京城帝国大学法文学部で、美術史学を専攻、藤田亮策教授の考古学の講義にも出られ、日本語は日本人以上に堪能で、筆者などへの書簡は時に、達筆な毛筆で巧みな文章で記され、毛筆を日常使用する日本人が少くなつた今日、何か温みを感じる次第である。このような人柄の教授であるが、金載元氏の懇望もあって、韓国国立博物館の二代目館長の要職に二カ年就任されたり、文化財専門審議委員などもされ、韓国考古学界の指導的立場にあり、韓国の考古学の成果は先ず自国民にとて、新資料を網羅した理想的なものにはならなかつたが、今日の韓国考古学界の研究動向、解放後約三〇年間の研究成果の大要是把握できる図書として、他に追随するものを見ない図書であり、アジアの古代文化、日本の古代文化に関心をもつ日本人研究者は是非とも一読を奨めたい図書である。

内容は、

序説 韓国古代文化と日本 金廷鶴
先土器時代
新石器時代

金廷鶴

1 幾何文土器文化

これに対し金廷鶴教授は印刷技術の優れた日本で、今日の韓国の研究成果をまとめた概説書を先ず刊行してはとの考えにもとづき、金基雄氏が日本から持ち帰った企画に賛同し、数カ年の歳月

を費して、ようやく前記した『韓國の考古学』の上梓を見たわけである。

金廷鶴教授も旧京城帝国大学法文学部の史料出身で、藤田先生の講義をとられた人である。

金廷鶴教授は最初本書を企画された際は、韓國の第一線で活躍されたが、種々、糺余曲折があつて最終的には教授のほか四名の執筆陣となり、しかも金良善教授 金正基文化財研究所長の論考は既発表、韓國文のものを翻訳に終つてしまつた。

金廷鶴教授の企画のように、韓国考古学界の研究者を総動員して、新資料を網羅した理想的なものにはならなかつたが、今日の韓国考古学界の研究動向、解放後約三〇年間の研究成果の大要是把握できる図書として、他に追随するものを見ない図書であり、アジアの古代文化、日本の古代文化に関心をもつ日本人研究者は是非とも一読を奨めたい図書である。

1 幾何文土器文化

一、中部地方の幾何文土器文化
岩寺里遺跡
漢沙里遺跡

二、西北地方の幾何文土器文化
智塔里遺跡

弓山遺跡

細竹里（第一文化層）遺跡

新岩里（第一文化層）遺跡

三、東北地方の幾何文土器文化

農圃洞遺跡

四、南部地方の幾何文土器文化

瀛仙町貝塚

五、幾何文土器文化の年代と性格

以上金廷鶴

2、幾何文土器時代の住居址

金正基

考古学第一輯に韓國文で発表されたものの翻訳である。

青銅器時代

1、無文土器文化

一、西北地方の無文土器文化

二、中部地方の無文土器文化

三、南部地方の無文土器文化

四、無文土器文化の年代と性格

2、韓國青銅器文化の源流と発展

一、青銅器時代の初期の様相

二、銅劍の発達とその形式の変遷

三、遼寧・長城地帶青銅器文化との関係

四、多鈕幾何文鏡の祖形とその機能

五、その他の諸問題

(一) 沿海州の青銅器文化の源流

(二) 触角式柄頭銅劍の起源

六、むすび

以上金廷鶴

3、多鈕幾何文鏡の祖形

一、多鈕幾何文鏡の名前と特徴

二、多鈕幾何文鏡の分布

三、形式の分類

四、多鈕幾何文鏡の祖形

五、年代の考定

4、磨製石劍の祖形

一、石劍の形式分類

二、金屬兵器との比較と祖形の考定

以上金良善

3は合同論文集（一九六三年）に（梅山国学散稿 金良善著

一九七二 崇田大学校博物館刊に再録）。4は古文化第一輯（一

九六二年）に韓國文で発表されたものの翻訳である。

三国時代

1、古墳の変遷

一、高句麗古墳

二、百濟古墳

三、新羅古墳

四、伽耶古墳

以上金基雄

2 土器

3 農工具

4 武具

5 馬具

以上李殷昌
金基雄

6 金属工芸

7 玉石・ガラス・木工芸

以上李殷昌

附篇 百濟武寧王陵と出土遺物

金廷鶴 李殷昌

以上のごとくで、大半を編者の金廷鶴教授が執筆され、実際に原稿を分担執筆されたのは金基雄、李殷昌の二氏にすぎなかつた。

しかし目次の内容が示すようにほぼ全般にわたって記され、最近の発見資料については、「あとがき」にも記されているように韓国国立博物館始め、多くの研究機関の協力が得られ、一応理想に近づくことのできる図書が完成したと見做してよいものである。

次に韓国で刊行の考古学関係の記事が掲載される主要雑誌を紹介しよう。

先ずソウルの国立中央博物館で刊行の「美術資料」がある一九七一年一二月十五号が刊行されて以後、しばらく出ていない。今年になり十六号が発刊されたか詳でない。仏教美術など美術関係の記事が多いが、考古学関係の資料も掲載されている。

韓国美術史学会刊（ソウル特別市竜山区漢南洞山八 檀国大学校博物館）の「考古美術」は一九七三年一二月まで一二〇号を刊行している。一〇〇号までは謄写刷で、発行部数も少いものであったが、一〇一号から写真挿図も多い、B5版の美しい体裁の雑誌になり、五〇〇部印刷されている。一〇〇号までのものも、印刷再刊が計画されている。本誌は考古学関係記事が多い。

また韓国大学博物館協会から一九六二年五月「古文化 第一輯」が発刊され、一九七三年五月に第十一輯が発刊された。本誌もB5版 写真挿図の多い雑誌で、考古学関係記事が多い。事務所は大学付設博物館のある大学がまわり持ちで、現在、ソウル市城東区の建国大学校博物館にある。

また国立ソウル大学校、文理科大学考古人類学科で一九六七年一月と九月に「韓国考古 1・2」を発刊したが、その後停刊している。B5版 五〇頁ほどの雑誌である。この後一九六八年六月、韓国考古学会が創立され、「考古学第一輯」が、A5版 一六〇頁ほどの雑誌として創刊されたが、これも翌六九年六月、第二輯を発刊後、休刊されたままになっている。

このほか考古学関係の記事も掲載されている歴史関係の主要雑誌としては、震檀学会刊の震檀学報（B5）歴史学会刊の「歴史

介したい。

- 「学報」(A5) 韓国史学会刊の「史学研究」(A5) 白山学会
 刊の「白山学報」(A5) 韩国史研究会刊の「韓国史研究」(B5)
 などがあり、また各大学校史学科で中心となって刊行の雑誌
 としては高麗大学校文理科大学の史学会刊行の「史叢」(A5)
 国立全南大学校(光州市)史学科刊の「歴史学研究」(A5) 全
 南大学校湖南文研究所の「湖南文化研究所」(A5) 慶熙大学校史
 学会の「慶熙史学」(A5) 檀国大学校史学会の「史学志」(A
 5) 漢陽大学校文理科大学史学科刊の「史学論志」(A5) 嶺
 南大学校新羅伽耶文化研究所刊(慶山)の「新羅伽耶文化」(A
 5) 東国大学校史学会刊の「東国史学」(A5) 梨花女子大
 学校史学会刊の「梨大史苑」(A5) などがあり、一、二のものを
 除いては本塾の史学科研究室書庫に保存されており、閲覧は可能
 である。
- このほか韓国内で刊行の原始美術というような観点に立つて刊
 行された図書として、金元龍著「韓国美術小史」三星文庫、一九
 七三年刊、金基雄著「韓国原始美術」正音文庫、一九七四年刊、
 など新書版で編集された手頃な図書である。いずれも一般の人々
 を対照に執筆された平易に書かれたものであり、われわれ日本人
 にとっては韓国語の勉学にもなるものである。いずれもカラー図
 版とモノクロの写真図版が豊富に入り、廉価版であることも魅力
 の一つである。金元龍教授のものとしては一九七四年刊の「原始
 美術」など近刊の大著もあるが、これは改めて紹介したい。
- 次回は国立博物館刊などの調査報告、大学研究所紀要などを紹

執 筆 者 紹 介

高瀬 弘一郎

慶應義塾大学文学部助教授

佐藤 正幸

慶應義塾大学院文学研究科博士課程

宮崎 洋

北海道教育大学釧路分校助教授

近森 正

慶應義塾大学文学助教授

江坂輝彌

慶應義塾大学文学部教授